様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２１４１

研究課題名（和文）スマトラ・マレー半島におけるシュリーヴィジャヤの美術史学的調査研究

研究課題名（英文）Art Historical Research on Srivijaya empire in Sumatra and Malay Peninsula

研究代表者
伊藤　奈保子（ITO, NAOKO）

広島大学・文学研究科・准教授

研究者番号：２０４５２６２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：東南アジアに伝来したインドの宗教美術のうち最もインド色の濃いシュリーヴィジャヤの造形的特質を明らかにするために、シュリーヴィジャヤの中心地と推定されているスマトラ、マレー半島に現存する神像、仏像、法具等を中心に調査研究を行った。スマトラのジャンビ出土の鋳造像はインドのパーラ朝か、マレー半島のドバラバティ様式に近いことが考えられ、スマトラの北部では南インド系の作品も認められた。インドの南東地域の一部の寺院はジャワのヒンドゥー寺院と類似し、マレー半島の像は南インドのチョーラ朝より影響を受けた可能性がある。いずれの地域も尊像及び法具から密教的要素が確認できたことも本研究の成果の一つである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to clarify the formative characteristics of Srivijaya, which reflect the largest influence from Indian religious arts in South-east Asia. Research was conducted on divine statues, Buddha statues and religious objects remaining in Sumatra Peninsula, assumed as the central place of Srivijaya. The investigation has shown that the artifacts in Sumatra are different from those of Java in shape, and that casting statues in Jambi share certain similarities with those from Pala in India or Dvaravati in Sumatra. There are also several works of southern Indian style in northern Sumatra. In addition, the form of temples in South-east India resembles Hindu temples in Java, which suggests the possibility that formative influence toward Malay was transmitted from Chola Dynasty in South India. The research concludes that the sculptures and religious objects in all abovementioned areas show certain features of Tantric Buddhism.

研究分野：人文学

キーワード：スマトラ　マレー半島　シュリーヴィジャヤ　仏像　密教

１．研究開始当初の背景

（１）東南アジアの７～12 世紀頃、マラッカ海峡を中心に東西貿易で重要な位置を占めていたとされるシュリーヴィジャヤ（Srivijyaya）は、その勢力や都、また宗教形態等が未だ明確にされていない。

（２）本研究では、先行研究からシュリーヴィジャヤの中心地と推察されるスマトラ(Sumatra)、マレー(Malay)半島に焦点をあて、それぞれ現地の文献資料が少ないことから、神像、仏像、法具等の資料を収集し、未体系であるそれらの分類、検証を行うことにより、美術史の視点からシュリーヴィジャヤの一解明を目指すものである。

２．研究の目的

（１）スマトラ、マレー半島で体系化がされていない作品群の資料収集し、それらの特徴と、体系化を試みる。

（２）収集した作品の分析を行い、インドの碑文、中国の文献資料等による歴史的検証のもとに、地域間の関連性を含めた総合的な考察を行う。

３．研究の方法

（１）スマトラ、マレーシア等に重点をおき、神像、仏像、法具等を中心に資料収集を行う。調査予定の博物館、美術館、資料館等には事前に連絡し、収蔵庫及び、展示ガラスケースから、作品を適宜移動し、簡易スタジオにおいて写真撮影、測量、調書作成等を行う。

　測量は、鋳造像はミリ単位を基本とし、型が復元できるように精密に行う。調書は原所在地、形状、図像等を記述する日本美術史の方法論を用い、撮影はデジタルカメラによる照明撮影を基本に、作品によっては損傷がなきように注意してストロボを用いる。また作品について、館の所蔵資料を現地で収集する。基本データ収集後は、図像解釈、用途解明、制作年代の推定、出土地のマッピング、文献資料との照合を行う。図版と調書は、広島大学文学研究科伊藤研究室に保管する。

（２）スマトラの作品の調査地：前回の科研調査にて、金銅仏等は収集されている。特に、スマトラの作例が多く所蔵されているジャカルタ国立中央博物館の尊像については、詳細な調査を行った。

　スマトラ北部、グヌン・トゥア（Gunung Tua）出土の三尊形式の像（no.B-626d/ 中尊 15.8cm/ / 1024 か 1039 年）は、ジャワでもマレー半島でもない、南インド地域の面相との類似がみられ、マレー語の銘文も確認できることから申請を行い、再度調査を行った。これについては論文を作成する予定である。また館に所蔵される像の位置関係を確認するべく、西部パダン（Pgdang）地域のアデットゥヤヴァルマン博物館、チャンディ・パダン・ロコ（Candi Padang Roco）等も訪問した。

（３）ヨーロッパの博物館：大英博物館、アシュモレアン博物館、ギメ美術館、リンデン博物館、アムステルダム国立博物館、ライデン国立民族学博物館、トロッペン博物館等。

　また、インドの尊像の造形の源流を学ぶために、イタリアの博物館等でギリシャ・ローマ彫刻の造形を確認した。

（４）インドの調査：デリ―国立博物館、コルカタ国立インド博物館、ナーランダ博物館、パトナ博物館、ブッダガヤ博物館、アジャンター石窟、ピタルコーラー石窟、エローラ石窟、オーランガーバード石窟、カーヘンリー石窟、バージャーカーラー石窟、エレファンタ島など、で包括的にインド作例を確認し、スマトラ、マレー半島に関連する造形を求めた。

　また尊像が獣皮をまとう例が多くみられることから、動物園（Nehru Zoological park）でヒョウ、虎、鹿などを確認した。また地理的にベンガル湾に面した東岸部、及び南東地域の博物館、遺跡を重点的に回った。特にチェンナイから南、現在のタミル・ナードゥ（Tamil Nadu）州のマハーバリプラム（Mahabalipuram）、またカーヴェリー川（kaveri）を越えて、タンジャーヴール（Tanjavur）、クンバコーナム（kumbhakonam）などの寺院、尊像についても調査を行った。

４．研究成果

（１）スマトラについて：島南部のパレンバン（Palembang）、バトゥ湖（Batu）出土の石碑（no.155/225 cm/7 世紀頃）に、古マレー語でシュリーヴィジャヤ王への忠誠についての記述があり、7 世紀頃にこの地域がシュリーヴィジャヤの勢力内であったことを裏付けるものである。今回もその確認を行った。さて、スマトラは、石造像が仏教、ヒンドゥー教に関する約 2m ほどの巨像が確認できたが、鋳造像は少数で、法具に至ってはほとんど見つけることができなかった。また遺跡群においても焼成煉瓦が使用され、その多くが荒廃し、基壇部のみを残すものが多く、または後世に原形とは限らない修復がされている。隣島のジャワでは、本研究者の調査で鋳造像が約 1000 軀、法具が約 600 例確認でき、比較的寺院も当時の形をとどめ、石造像も多く残存しているのに対し、スマトラについては宗教的考察を行うにおいて資料が極端に少ない。

　そのなかにあって、調査の結果、現存する作例等をもとに分析を行った結果、北部アチェ（Ache）出土の五仏と推察される宝冠を戴いた仏頭（ジャカルタ国立中央博物館、no.248）がみられ、この地に密教的要素も考えられ、またメダン（Medang）州立博物館には南インドと考えられる仏坐像等が確認でき、島北部に南インドの影響もうかがえる。また、先にあげたグヌン・トゥア出土の三尊形式の像（no.B-626d）は、ジャワの尊像と

は異なる像容で、南インドとの関連性が考えられ、またマレー半島の一部の尊像の特徴である「かかと」が突出する形状にやや類似する点がみられた。そして台座背面には、古マレー語が刻まれているここから、総合して、この像は多地域の混在が考えられる。

三尊形式の像 /グヌン・トゥア出土

スマトラ島の中央部よりやや南方に位置するジャンビ（Jambi）（シュリーヴィジャヤの一都市と此定されるマラユ）地域では、2012～2014 年、科学研究費（c）「スマトラにおけるシュリーヴィジャヤ・マラユに関する美術史学的調査研究」の調査で確認した、ジャンビ州立博物館所蔵、金銅仏の四臂観音菩薩立像（no.04.093/39.4cm/10～11 世紀頃)、今回、2016 年に論文に著した四臂菩薩立像（no.04.094/29.0cm・背面全体に破損、足首から下欠損)が出土している。それぞれ、スマトラで傑出した優品であり、四臂観音菩薩立像の「かかと」が突出している。これらの像容は、インドのパーラ朝かマレー半島のドバラバティ様式に近いものと推察され、ジャンビの東南部パレンバン、コムリン（komering）川出土の金銅仏の如来立像（no.6025/C.149:25.0cm/9 世紀頃か)、および八臂観音菩薩立像（no.6024/53.0cm/9～10 世紀頃か)、弥勒菩薩坐像（no.6023/40.0cm/9～10 世紀頃か）の 3 軀の仏像群とも像容が異なる。

このように、残存する尊像等がバラエティに富むスマトラでは、隣島のジャワよりも、むしろマレー半島から文化が伝来し、インドとの関連性も強く、両者が混在した地域であったものと推察され、シュリーヴィジャヤの一形態をあらわすものと思われる。

（2）マレー半島について：調査で確認したタイの国境に近い、マレーシア西北部の、ブジャン・バレー考古学博物館に鈴（閉鈷式三鈷鈴か）が出土した記録があり、またバンコク国立博物館所蔵の青銅製の四臂観音菩薩像（70cm/8～9 世紀頃/両腕・腰から下欠損)、及び八臂観音菩薩立像（65cm/8～9 世紀頃）は、タイ南部に位置するチャイヤー出土で、像容がインドのグプタ朝からパーラ朝の影響が考えられる。

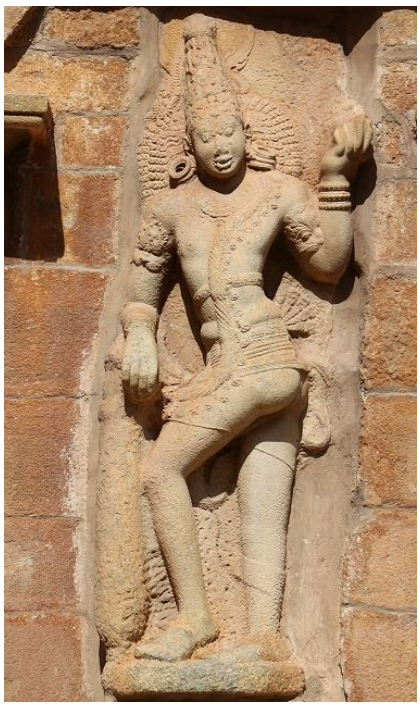
四臂観音菩薩像/ チャイヤー出土

また、クアラルンプール国立博物館所蔵のペラク出土の不空羂索観音菩薩立像（86.4cm/8～9 世紀頃）は「かかと」が突出し、その法量の大きさと、作品の完成度の高さから、シュリーヴィジャヤで観音信仰が行われていたことの一論証となりうる像である。

（3）インドについて：シュリーヴィジャヤの尊像の影響を与えたインドの作例を確認すべく、デリ―国立博物館、コルカタ国立インド博物館をはじめ、アジャンター石窟、エローラ石窟等の像を確認した。得られた資料とシュリーヴィジャヤとの関係性についての詳細は、今後、順次論文でまとめてゆきたい。また、スマトラから南インドの像に類似する作例がみられたことから、ベンガル湾沿いに南部から東部にかけての博物館、及び寺院の調査を行った。

まず、チェンナイから南 60 kmのマハーバリプラムの 7 世紀頃建立された海岸寺院は、ドラヴィダ建築の祖型寺院と考えられ、祀られているヴィシュヌ神像は 7 世紀頃と推察され、その像容と、ガンガーの降下（Descent of the Ganga）と称される横幅約 29m、高さ約 13m の岩の彫刻も、インドネシアの像容が類似しているように思われた。また、7 世紀半ば頃のファイブ・ラタ（Five Rathas）と称される寺院（巨大動物の彫刻有り）は、ドラヴィダ建築様式の５つの「プロトタイプ」ともみなされ、一寺院の屋根には、顔面のみがのぞくように彫刻されており、この形式は、広くインドネシア、マレー半島でも確認する

ことができ、関連性が推察される。
　次に、中国の文献資料『宋史』に、「1005年シュリーヴィジャヤの王が、南インドのチョーラ朝の王に、コロマンデル海岸に往来するシュリーヴィジャヤの商人達のために港町のナーガパティナムに仏教寺院の建立を懇願した」と記載があることから、インドのチョーラ朝との関わりを考察すべく、チェンナイから南、カーヴェリー川を越え、チョーラ朝の首都として9～13世紀頃に栄えたとされるタンジャーヴール（Tanjavur）の調査を行った。特にラージャラージェーシュヴァラ（Rajarajesvara）寺院(後代、通称ブリハッディーシュヴァラ寺院)はチョーラ朝最盛期の 1003～1010 年建立とされ、守門像に関して、門の入り口に対で立つ形式、及び忿怒の面相などは、スマトラ、及び東部ジャワ期の像に通じるものがあると推察される。
　また、チョーラ朝初期の寺院として、9 世紀中頃のヴィジャヤーラヤ・チョーリーシュヴァラ(Vijayalaya Colisvara)寺院、9 世紀末～10 世紀初頃と推定されるナーゲーシュヴァラ（Nagesvara） 寺院、ブラフマプリーシュヴァラ（Brahmapurisvara）寺院、コランガナータ（Koranganatha）寺院、ムーヴァルコーイル（Muvarkovil）寺院等を訪ねた。特に、ヴィジャヤーラヤ・チョーリーシュヴァラの守門像の髪型の表現は、スマトラ北部のパダン・ラワス（Padang Lawas）の遺跡、ビアロ・バハルⅠの身舎の彫刻像の髪型に類似する。南インド、特に現在のタミル・ナードゥ州で収集した資料を含め、チョーラ朝以前のパッラヴァ朝の寺院、尊像の調査、考察を今後の課題に定めることとした。



ヴィジャヤーラヤ・チョーリーシュヴァラ寺院の守門像

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）
１．Naoko Ito, Study of a Four-armed Gilt Bronze Standing Bodhisattva Unearther in Jambi,South Sumatra,
印度學佛教學研究、査読有、第 64 巻第 3 号（通巻 139 号）、2016 年。
pp.279-286, pp.435-436.

２．伊藤奈保子、スマトラ島パダン・ラワスの遺跡について、豊山教学大会紀要、査読無、第 45 巻、2017 年、63～77 頁。

〔学会発表〕（計　２件）
１．伊藤奈保子、ジャンビ州立博物館・アディッヤワルマン博物館所蔵の仏像について、中国四国歴史地理学協会 2017 年度大会、2017 年 6 月 11 日。

２．伊藤奈保子、南スマトラ、パレンバン地域における石造尊像について、豊山教学大会、2017 年 6 月 29 日。

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者

伊藤奈保子（ITO,Naoko）
広島大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：２０４５２６２５

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者

朴　亨國　(PARK,Hyounggook)
武蔵野美術大学・造形学部・教授
研究者番号：００３５０２４９